

アドルフ・ロースの趣向とプロダクトデザイン

Adolf Loos プロダクト 近代

工芸品 JosefHofmann

アドルフ・ロース研究出版ゼミ 浦上卓司

序. 研究目的

建築家アドルフ・ロース (Adolf Loos, 1870-1933) が残した言説にはプロダクト [1] に関する具体的な社名やデザイナーの名が頻出する。しかしロース研究において、彼が批判／賞賛したプロダクトは具体的に分析されずに概念ばかりが扱われる傾向がある [2]。そこで本研究では、ロースの批評対象物を具体的に明らかにし、彼がプロダクト分野において目指したデザインを明らかにすることを目的とする。

1. ロースの言説におけるプロダクト

■一貫した主張

アドルフ・ロースの批評活動は彼がアメリカから帰国した直後の 1897 年から 1932 年まで継続的に行われ、論稿の残した論稿の数は計 166 篇に及ぶ。そのうちプロダクトを主要なテーマとした物は 55 篇確認できた。彼のプロダクト批評の特徴として、明確な賞賛と批判が対になって論じられることが挙げられる。

彼は 2 つの作品を製作している。「シンデレラ」と「眠れる森の美女」をモチーフにしたものだ。(中略)「シンデレラ」では、顔の部分のように絶対必要な部分でのみガラス彩色画技法が採用され、全体的には溶解技法を使って調和を保っている。だが「眠れる森の美女」はひどい。ガラス彩色画技法で描き込まれたバラの生け垣は、誠実な職人仕事をぶちこわしにするものだ。

1897「オーストリア博物館のクリスマス展示会 (Weihnachtsausstellung im Österreichischen Museum)」(Neue Frie Presse,

■賞賛／批判したプロダクト

ロースが言及したプロダクトは、椅子、食器、陶磁器、絨毯など多岐にわたる [3]。



図2 チップペンデル (Thomas Chippendale, 1718-1779) の椅子

- ・ロースが賞賛した椅子
チップペンデルの椅子は文句のつけようがない程、完璧なものだ。
- 1929「ヨーゼフ・ファイリッヒ (Josef Veilich)」
- ・ロースが賞賛したドアノッカー
グルシュナーのブロンズ作品は注目に値する。とりわけドア・ノッカーはウィーン人たちを惹き付けている。これを欲しが人も多い。もしグルシュナーがファルグレンをそれほど意識していなければ、彼の作品はもっと光を放っただろう。

1898「工芸の展望 II (Kunstgewerbliche Rundschau II)

・ロースが批判した椅子

この部屋にふさわしいものはすべてそろっている。型押しした木工象



図4 グルシュナーのブロンズ製ドアノッカー

嵌細工つきの板張り壁。古いドイツの装飾用長椅子 (初めから座る用途がなく、当時はさぞ邪魔だっただろう。今は消えてくれてせいせいしている)。
1897「オーストリア博物館のクリスマス展示会 (Weihnachtsausstellung im Österreichischen Museum)」 [3]
・ロースが批判したステンドグラス
レフラーは、ステンドグラスを設計する際、技術上の問題につまずいたようだ。彼は 2 つの作品を製作している。「シンデレラ」と「眠れる森の美女」をモチーフにしたものだ。(中略)「シンデレラ」では、顔の部分のように絶対必要な部分でのみガラス彩色画技法が採用され、全体的には溶解技法を使って調和を保っている。だが「眠れる森の美女」はひどい。ガラス彩色画技法で描き込まれたバラの生け垣は、誠実な職人仕事をぶちこわしにするものだ。

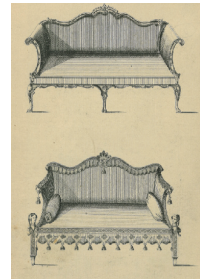


図1 装飾用長椅子



図3 レフラーの部屋のステンドグラス

2. ロースの作品におけるプロダクト

■ロース自身がデザインしたプロダクト

ロースがデザインしたプロダクトはテーブル、椅子、照明、グラス、時計である。

・椅子

ロースがデザインした椅子にはトーネットの物を含めて 4 つのモデルがある。そのうちの一つに三脚の椅子は、その中でも最も早い 1899 年にデザインされ、その後 1903 年の「ヴィラ・カルマ (Villa Karma)」などにも配置されている。その際に座面の縁を曲げる改変が加えられていることがわかる。



図5 三脚椅子

・照明



この正十二面体の照明をデザインしたのは 1906 年の「フリードマン事務所 (Büro Arthur Friedmann)」においてであり、その後も正八面体や別の幾何学形の照明をデザインしている。

・時計

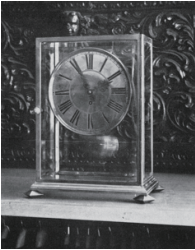
ロースが行った最初のプロダクトデザインは、処女作の URAGAMI, Takuji



1897
①エーベン
シュタイン紳
士服店におけ
る置時計

図
多角形照明

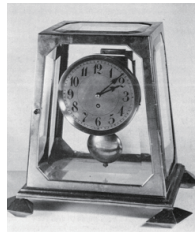
「エーベンシュタイン紳士服店 (Salon Ebenstein, 1897)」のための置時計だった。その後の作品においても微妙な変化を加えながら用いた。その変化は文字盤がローマ数字からアラビア数字になったことや、形状が台形になってゆくことである。しかし 1906 年の「フリードマン事務所 (Büro Arthur Friedmann)」で時計デザインの変化を停止し、1922 年の「ルーファー邸 (Haus Rufer)」ではフリードマン事務所と同一のデザインの置時計が配置されている。



1900 頃
②ロースがデ
ザインした置
時計



1906
③フリードマ
ン事務所にお
ける置時計



■ロースが採用したプロダクト

一方で、ロースは既成品を自作に採用することもしばしばあった。その例としてはドアノブや絨毯が挙げられる。既成品のドアノブをロースが最初に使用した作品は 1907 年設計の「ケルントナー・バー (Kärntner Bar)」で、以後の作品にも度々用いられている。絨毯についてロースはオリエント系のもが最良と述べており【註】、その絨毯を繰り返し用いている。

図 2 ロースの時計デザインの経年変化



図 3 ルーファー邸 (Haus Rufer, 1922)



図 シュタイナー邸 (Haus Hugo und Lilly Steiner) のドアノブ

3. ロースのプロダクトデザイン

■近代のプロダクトとロースのプロダクト
ロースはチッペンデルの椅子を評価するだけでなく、自身の作品にその複製作品を配置している。背もたれの部分の模様を微妙な変化を加えたもので、ロース作品の食堂の椅子に多く見られる。【註】。



図 1910「ヴォスコヴィッツ邸 (Friedrich Boskovits Apartment 1) の絨毯

■ロースのプロダクトデザインの特徴

ロースは食堂の椅子を全て家具職人ファイリッヒに任せたと語っている【1929「ヨーゼフ・ファイリッヒ (Josef Veilich)」。少数の職人と長期間の協働デザインを行うことは、ロースのプロダク



1918「シュトラッサー邸 (Haus Strasser)」

トデザインの特徴のひとつである。それによってロースは同時代よりも 100 年以上前のデザインを踏襲する傾向がある

■プロダクト分野におけるロースの理想

ロースはしばしば家具において「最高」が存在することを認める言説を残している【註】。

素材を知り抜き、コピーの作品をつくることもいとわない職人を好んだ使いやすしいものは現代的であり、現代的であることによって多種多様なプロダクトが調和すると言っていた。

結論

以上の考察により、アドルフ・ロースが同時代だけでなく過去のプロダクトも意識し、それが設計作品に反映されていることを確かめることが出来た。

このことは、時代を問わず実用性から考えて有益なデザインを継承するという設計の基本方針であり、職人的な建築家であろうとしたロースの仕事姿勢の現れと捉えることができる。

謝辞

本研究の執筆にあたって協力いただいた加藤淳様、アドルフ・ロース研究出版ゼミのみなさまに厚く御礼申し上げます。

【註1】ロースの批評対象は非常に多岐にわたるため「家具調度品」とインダストリアルデザインの意味も含んだ「プロダクト」という語を用いる。『日本国語大辞典』第17巻(小学館, 1975)より「プロダクト - デザイン (英 product design) 産業デザイン。広く、手工芸デザインとインダストリアルデザインの両者を含めていう。【2】伊藤哲夫『アドルフ・ロース』(鹿島出版会, 1980)「それにしても、あのフェティッシュな不健康な気配は何故か。(中略) こうしたヴィラ・カルマにおける体験は、他のどのロースの建築に「ロース好み」の素材の選択と扱いがつねに一貫しているからに違いない」ケネス・フランプトン「アドルフ・ロースと文化の危機 1986-1931」(『a+u』1985.12)「ロースが好んだのはアングロ・サクソン系の中流階級の控えめな衣服、無名の家具、効率の良い配管などであった。この点についていえば、彼の胸中にあったのは英国よりも米国であった」など【3】アドルフ・ロース著、加藤淳訳『虚空へ向けて』(アセテート, 2012) p29【4】同上 p30【5】同上 p42【6】1929「ヨーゼフ・ファイリッヒ (Josef Feilich)」『装飾と犯罪』(伊藤訳, 2005) pXX

図版出典【図1】左図: 2011年度アドルフ・ロース研究出版ゼミの訳注作業より発見された MEISTER DES ORNAMENT, STICHS DAS ROCOCO. (出版社・出版年不明)より抽出。右図: Spoken into the Void, J.O.Newman, J.H.Smith Verdion 訳, MIT Press, 1983より引用【図2】上図: Burkhardt Rukschcio, Roland Schachel, ADOLF LOOS: Leben und Werk, (Reiudenz, 1982) p44 (以下 Ruks と表記) 中図: 『ウィーン世紀末 - クリムト, シーレとその時代』(セゾン美術館編, 1989) p399. 下図: Ruks, p45【図3】Markus Kuristan, Wohnungen, Album, 2001【図4】左図: Ruks, pXX 右図: アドルフ・ロース研究出版ゼミ 2010年度ウィーン調査により撮影